叶わない恋

和茶巣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
叶わない恋

【Ｎコード】
Ｎ６７１２Ｙ

【作者名】
和茶巣

【あらすじ】
何をやるにもやる気がでなかったある男子。
中学に入り部活紹介の時にみた吹奏楽部に衝撃を受けるそこの先生に恋した生徒の話。
そんな、ＢＬな物語です。
大阪の学校なのでほぼ大阪弁になると思いますｗｗ

プロローグ

俺には好きな人がいる。
その恋は絶対にかなわない。
自分ではわかっている。
だけど、何度も何度も諦めようとしても駄目だった。
なんで、俺はこの人に恋をしたんだろ？
あなたの目には俺はどんな風に映っていますか？
やっぱり、ただの生徒にしか見れないですよね？
もし、ちがう存在に映っているなら俺は死ぬほど嬉しいです。
どうすれば、好きになってくれますか？
頑張ってる子が好きって言ってましたね。
すごく頑張れば誉めてくれますか？
好きになってくれますか？
大好きです先生。
こんなに人を思うのは初めてです。
なので、俺を好きになって下さい。
お願いします。
それが、ぼくの願いです。

始まり（前書き）

長嶋（ながしま）　晃（あきら）

この物語の主人公

何をやるにもやる気がでなかった。

中学に入り部活紹介の時にみた吹奏楽部に衝撃を受け、入る事を決心する。

普段はテンションが高くてイタイところもあるが、皆に好かれている。

常にメガネをかけている。

始まり

俺は中学に入って何もやる気はなかった。
いつもの何もない日々。
正直言って退屈だ。

次の時間は部活紹介らしい。
俺は体育館へと足を動かした。

俺は衝撃を受けた。
お世辞にも上手いとも言えないが、かっこいいとは思った。
俺はこの部活に入ろうと決心した。

タッタッタッ
「ようｗｗ　お前はなんの部活にはいる？」

「俺は吹奏楽部に入ろうと思ってる」

「マジかよ！　意外だな！！」

「そうか？　どっちにしろ俺は運動音痴だから、運動部は無理だしｗｗ」

「そうだよなｗｗ　まぁ、頑張れ！　応援するからな！」

「サンキュー！　お前もがんばれよ！！」

そう俺は決めた。
この部活に入って今までの自分を変えると。
それが、すべての始まりだと知らずに。

出会い

「あぁもう！！」

俺は完全に迷っていた。

「なんで、こんなに広いんだ！」

吹奏楽部に見学に行きたいのに今俺はどこにいるんだ？
地図手元にねぇし！
どうしよう？

「はぁ、ついてねぇな…。」

バンッ

「痛っ！！」

俺は悩んでいると、誰かにぶつかったらしい。

「あぁ！！　ごめん！　君大丈夫？」

優しい声だな。

「あぁ、俺は大丈夫です。　俺の方こそすみません。　よそ見して歩いていたんで。」

「よかった。　それじゃね。」

あっ、この人!!

「ちょっと待って下さい！　もしかして、さっき吹奏楽部の演奏で指揮をしてた人にはですか?」

「ん?　あぁそうだよ。　どうして?」

やった!!

「今俺、見学に行こうと思ってたんですけど、道に迷って…。」

「あっ、そうなんだ。　ちょうど、俺も部室に行くからついておいで。」

あっ、優しい人だな…。
つか、この人身長ちっさいな。

「?　どうかした?」

「あっ!　何でも無いです!」

「そう?　ついておいで。」

「はい!」

部室へ

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったね？　名前なんていうんだい？」

「あっ、俺の名前は長嶋　晃っていいます！」

「長嶋かわかった。　覚えておくよ。」

「よろしくお願いします！　ってあの、今さらなんですけど……。」

「どうした？」

「俺、先生の名前知らないんですけど……。」

「あぁ、そういえば教えてなかったっけ。　ごめんな。」

「いや、全然いいです！！　謝らないでくださいっ！」

「ははははっ　焦ってかわいいなｗｗ」

なっ／／／／
この人！！

「からかわないでください！　それより名前を教えてください！！」

「ごめんごめんｗｗ　俺の名前は野川　新司　今、三年の理科を担当している、学年主任だ。」

学年主任って結構偉い人なんだな…。

「野川先生ですね！　改めてよろしくお願いします！！」

「あぁ。　ってもうつくからな。」

「はい！」

普通に優しくてかっこいい人だな…。

「長嶋、驚くなよ。」

「へ？　何がですか？」

そういって、野川先生は音楽室のドアを開けた。

部室へ（後書き）

野川（のがわ）　新司（しんじ）

三年の理科を担当している、学年主任の先生。
とても、生徒思いのとても優しい。
まだ、何か隠された事がいっぱいある謎の多い人物。
身長が男性なのに、１６４?しかなく、身長が低いとか言われると落ち込む。

部室での出来事

「いらっしゃい新しい一年生ボーイ！」

「たくさんの部活からこの部活を選んでくれた事に感謝するで！」

「君の瞳に乾杯☆」

「って、なんだよそれｗｗ」

そう言って先輩たちは騒いでいた。
そして、俺は固まっていた…。
そして、後ろからただならぬよね殺気を感じた。
それを先輩が感じとったのか先輩たちはさっきまでのテンションじゃなくなった。

「……。　なぁ、皆俺は一年生の後ろからただならぬ殺気を感じんねんけど……。」

「あぁ。」

「……。　そこの一年生こっちにおいで☆」

「……ふぇ？　あっはい。」ガッ

そう言って、先輩は俺の腕をつかんだ。
そして、俺だけ音楽室に入れられた。
そして、先輩は大声で叫んだ

「今だ!!　部室のドアを閉めろ!!!」

「アイアイサー!」

先輩たちはいそいでドアを閉めようとした……。
だが、

ガツ
「お前ら…?　いったい、何をしているんだ?」

先生は笑顔でいつも以上に優しくいっている。
それがいつも以上に怖かった…。

「皆、今やることはわかるよな?」

「「おう!」」

「せーの」

「「すみませんでした!!!」」

俺は初めてこんなにきれいな土下座を見たかもしれない…。

「はぁ、わかったから進藤こいつに部活の紹介をしてこい。」

「わかりました。」

俺は部室の端のほうに呼ばれてこの部活の説明を聞いた。
他にも一年生が来たらしいが、今は各パートの練習を見に行ってるらしい。

「初めまして、俺はこの部活の部長をしてます。　進藤です。楽器はクラリネット吹いてます。」

「おいおい、進藤君？　下の名前も言ってごらん？」

「なっ！！　悠斗余計な事をゆうな！」

「ほらほら☆」

「薫…。ボソッ」

「えっ？」

「もうちょっと大きな声で！」

「あぁもう、わかったがな！　かおるや！！　進藤　薫！　これで

いいんやろ！」

「かおるん良くできました！」

「うるさい！　ってお前もついでに自己紹介しとけ。」

「うっすｗｗ　俺は岡村　悠斗☆　副部長と皆のテンション上げていく係をしてますｗｗ　担当楽器はチューバやで☆　よろしくな☆」

「悠斗そんな係はない。」

「わかっとるってｗｗ」

「まぁ、よろしくな長嶋。」

「はい！」

楽しい先輩ばっかりだなｗｗ
ちゃんと頑張ってみよう。

部室での出来事（後書き）

進藤（しんどう）　薫（かおる）
三年生
この部活の部長をしている。
楽器はクラリネットを吹いていて、とても優しい。
だか、怒ると怖い。
下の名前で呼ばれるのを嫌う。
悠斗とは仲が良く大抵は一緒にいる。
しかし、言い合いは毎日のようにしている。
よく、同期からは吹部のお母さんと呼ばれている。

岡村（おかむら）　悠斗（ゆうと）
三年生
この部活の副部長をしている。
楽器はチューバを吹いている。
テンションが高く、緊張している人を見るとすぐにほぐしにいく。
普段は、こんな性格だか演奏が始まると、薫より怖くスイッチの切り替えがちゃんと出来る人。
優しく、一人一人ちゃんと見ている。
この部活で、薫と二人で夫婦と呼ばれている。

吹奏楽部の先輩
皆とても優しく、テンションが高くて団結力が高い。
なので、ふざける時も一緒だ。

パート紹介

「晃くんやったけ？　今から、各パート紹介をするな☆」

そう言って岡村先輩は席を立った。

「まずは、俺のパートからいこう。」

そう言って、進藤先輩も席をたった。

「え～！　かおるんのところからなん！」

「かおるん言うな！　しゃあないやろ、俺のところからのほうが一番いいしお前のところからいってもあれやろｗｗ」

「なっ！？　まぁ、お前が言うんやったら俺はついて行くけどなｗｗ」

「ありがとうな。」

なんと言うか、仲が良いなｗｗ

つか、ラブラブ？

いや、それはねぇかｗｗｗｗ

「まぁ、とりあえずいこうや☆」

そう言って先輩は笑顔で俺にいった。

「はい！」

ガラッ

「にしても、晃くんラッキーボーイやな☆」

「まぁ、確かになｗｗ」

「え？　なんでですか？」

「普通にきたやつは俺ら部長、副部長に会ってないねん。」

「そうなんですか？」

「そう緊急部活会議があって俺たち一年生に会ってないんねんｗｗ」

「だから君はラッキーボーイなんやねんなｗｗ」

そう言って、二人は笑っていた。
俺はラッキーボーイなんか？
そう思いながら先輩の話を聞いていた。

「おっ着いたぞ！」

「ここが、俺が担当しているクラリネットパートやで。」

「おじゃまします。」

「クラリネットは主にメロディーを担当している楽器や。　そして、クラリネットより一回りぐらいデカイ楽器がバスクラリネット。クラリネットより低い音をだす楽器や。」

「つまり、バスクラリネットは低音楽器、クラリネットは高音楽器になるねん☆」

「へ～」

「次はフルートパートに行こうか。」

「はい！」

そういって、先輩は他に色々なパートを紹介してくれた。

「最後に、俺のパート行っちゃうで☆」

「はい！」

「悠斗のパートはチューバ。　メロディーがなく、伴奏を主に担当している楽器やで。」

「つまり、縁の下の力持ちや、大黒柱、土台ってことやな！」

「へ～、すごいんですね。」

「ありがとう☆」

「じゃあ、これで全部のパートを紹介したやんな？」

あれ？
あの楽器……。
まだ、紹介されてないよな？

「あの、すみません。　あの楽器まだ紹介されてないです……。」

「あぁ、あの楽器かいな。」

「んじゃ、紹介したるな。」

なんで、先輩たちはこの楽器を紹介しなかったんやろ？
ただ、忘れてただけやろうか？

最後の一つ

「あの楽器は、ユーフォニウムっていってな、金管楽器の中低音を担当しとる楽器や。」

「紹介せえへんかったのは、吹いてる人が一人もおらんからやねん…。」

えっ、吹いてる人が一人もいない!?
なんでだろう…。

「長嶋!　長嶋!　どうしてん?」

「えっ?　あっ、すみません!　あの、吹いてる人が一人もいないってどういう事ですか?」

「あのな…、ユーフォの子やめてしもうてん……。」

「ついていかれへんくなってんて…。」

「そうなんですか…。」

「でも、心配することはないで!」

「えっ?　なんでですか?」

「野川先生おるやろ？」

「あの人は実はユーフォやっとんねんｗｗ」

えっ、野川先生が！？

「それ、マジですか？」

「マジマジおおマジｗｗｗｗ」

「綺麗な音して、かっこいいねんで！」

野川先生も楽器吹くねんや…

「それは、聞いてみたいですね！」

「でも、俺たちでもあんまり聞いたことないねん…。」

「そうそう、先生なかなか吹いてくれへんねん…。　けちやろｗｗ」

なかなか吹いてくれへんねんや…。

でも、先生の吹いてる姿見てみたいな！

「まぁ、運が良かった晃くんやったら見れるかもなｗｗ」

「見れたら嬉しいですけどねｗｗ」

「まぁ、頑張りやｗｗ」

「そろそろやな、長嶋これで案内終わるけど、質問ある？」

「…あの、初めてなんですけどちゃんと出来ますかね？」

「当たり前！　皆初めて楽器持った子がたくさんおるでｗｗ　でも、半年もすればうまくなるわ！」

「初めてでも、安心だから入ってくれよな！」

「はい！」

決めた、やっぱりこの部活でやって行こう。

そして、今までの自分を変えてみせるねん！！

音色

「あ～！」

本日二回目の学校…。
下校時間とっくに過ぎての学校…。
原因は俺が学校に忘れ物をしたから…。
明日取りに行けばいい？
確かにｗｗ
でも、あれはバレたら没収されるからｗｗ

「にしても、何処に落としたんやろ？　ここまで探して無かったら…。　音楽室やんな～。」

俺は足を音楽室に向け歩きだした。

「だれにも、アレが見つかってませんように！」

つか、俺先生に見っかったらヤバいよな～ｗｗ
てか、音楽室あいてんのかな？
まっ、行ってから今後どうするか決めよ。

♪～　♪～　♪～

「ん？　この音なんや？　何処から聞こえてくんねん？」

俺は音を頼りに歩いていった。
そしたら、音楽室についていた。

「げっ！？　誰かおるやん！　あかりもバッチシついとるし、音も…。　いったい、こんな時間に誰やねん！」

俺は恐る恐るドアを少し開けて部屋の中を覗いてみた。
そしたら、そこにいたのは野川先生だった…

「なっ！？　野川先生！　こんな時間に練習？」

先生は見たことないほど真剣で、同じ所でも出来るまで、何十回も繰り返しやっていた。

「はぁ、できねぇな…。　つか、コンタクトはきつい！　眼鏡持ってくればよかったな……。」

そう言って先生は真剣な顔に戻り、またユーフォを吹いていった。

俺は目が離せなかった。

って、こんな事をしている場合じゃない！！
はやく、アレを取りに行かないと！！
でも、どうやって…。

「あ～！！　もう！」

俺が叫んだその時だった…。

「うっさい！　今何時やと思うねん！！　下校時間とっくに過ぎてんねんぞ！！」

「あっ、先生…。」

「長嶋かいな、何しとんねん！」

「ちゃうねん！　忘れ物をして取りに来ただけやねん！！」

「はぁ！？　……しゃたないな。　はよなかはいって取ってこい！」

「ありがとうございます！」

チャンス！　はやく探し出して没収だけは避けなあかん！！

「無い！　無い！　何処にもない…。」

「なぁ、長嶋は何を探してるんや？」

「えっ！？　なんでもいいやないですか～ｗｗ」

「なぁ、これじゃ無いよな？」

そう言って先生はポケットの中からネックレスを取り出した。

「っ！！　それだぁー！！！」

俺は思わず叫んでしまった…。
その後の先生の顔はいうまでもなく怖かった…。
でも、先生からアレを取り返さな！！

ハプニング？

ヤバいヤバい！
この学校はアクセサリーは禁止で見つけしだい没収なんだよな…。
でも、アレだけは！

「先生！！　それだけは、返してください！」

そう言って、俺は土下座をした。
他人からみたらどれだけ無様だった事だか…。

「先生！　一生のお願いです！！　それだけはどうか没収しないでください！！」

「おい、顔あげろ」

「先生！？」

俺は目を輝かせて先生を見た。

「そんな目をキラキラさせんな！　けど、お前もわかってるだろ？
アクセサリーが見つけしだい没収だって事は…。」

「それだけは、返してください！　お願いします！」

「……。　はぁ。　しゃあないな…。　ほら、そんなに大切な物だったらもう学校に持ってくんなよ！」

「先生ありがとう！　神やわ！」

ガッ

「ふぇ！？」

俺は手を伸ばしたその瞬間床に滑って転けそうになった！

ヤバい！

転ける！！

バッ

ガタンッ

痛…くない？

それも、何か暖かいし柔らかい…。

もしかして！！

目を開けたら人の上に乗ってる事がわかった。

やっぱり、先生にかばってもらって…。

「先生！　大丈夫ですか！？」

「大丈夫大丈夫ｗｗ　それより、お前の方は大丈夫か？」

「大丈夫です…。　本当にすみませんでした！」

「大丈夫だってｗｗ」

そう言って先生は俺の頭を撫でてきた。
そして、笑顔で

「お前が無事ならよかった…。　だから泣くなや…。」

先生に言われて初めてきずいた。
俺は泣いていた。

「そんなごどいっだっで…。　先生を下敷きにしで俺…。」

「大丈夫だってｗｗ　ほらピンピンしてるだろ？」

そう言って先生は立ち上がって腕や足などを回していた。

「なっ？　大丈夫だろ？　それにしても、長嶋はいいやつだな！」

「ふぇ？　なんでですか？」

「だって俺のために泣いてくれたんだろ？　いいやつじゃないか！」

先生は笑顔でまた頭を撫でてきた…。

「あっありがとうございます。　それに、先生が無事ならよかったです！」

「そうかｗｗ　って、時間がヤバいな…。」

「ほんとだ…。」

「送っていってやろうか？」

「大丈夫です！　それより、ネックレスありがとうございました！」

「明日からは持ってくるなよ！」

「はい！それじゃさようなら！」

はぁ、あってよかった！
にしても、顔が熱いし、動機も早い…。
俺風邪でもひいたかな？

その時俺はまだ知らなかった。
それが、恋になるなんて…。

登校中〜

ふぁ〜
眠い…。
つか、学校まで遠いんだよな…。

「お〜い！　長嶋くんおはようｗｗ」

そう言って進藤先輩が歩いてきた。

「あっ、おはようございます！　先輩もこっち方面なんですか？」

「そうやでｗｗ　あっちの角を曲がった所にマンションあるやろ？あそこが俺の家やねんｗｗ」

「そうなんですか！　俺の家その近くです！」

「ほんまかｗｗ　んじゃ、朝時々会うやろうなｗｗ」

「はい！　……。　先輩質問していいですか？」

「どうしたん？」

「岡村先輩と一緒じゃないんですか？」

「あぁ、あいつは今から迎えに行くねん…。」

「そうなんですか？」

「あぁ、んで毎回遅刻ギリギリになんねんな…。」

「え…？」

「あいつ、俺が来たら起き出して用意し始めんねん…。」

「ははは…。　それはお疲れ様です…。」

「ありがとうｗｗ　んじゃ、俺は迎えに行くからバイバイ」

「さよなら」

すごいな…。

つか、迎えにまでいくんや…。

進藤先輩お母さんみたいやな…。

キーンコーンカーンコーン
キーンコーンカーンコーン

うし、今日の授業は終わった！
吹奏楽部の見学にでも行こうかな！

……。
また、このパターンかよ！
つか、この学校広すぎるんねん！
ほんま無いわ～！

「ん？　長嶋じゃないか！　どうしたんだ？」

「先生～！　聞いてくださいよ！」

「そうかｗｗ　また道に迷ったのかｗｗ」

「だって、この学校広すぎるんですもん！」

「ははははっｗｗ　今度お前が道に迷ったらお前の背中に音楽室までの道を教えてくださいとでも書いておこうかｗｗ」

「やめてくださいよ！　そんなことかいたら一生の恥ですよ！」

「ははははっｗｗ　冗談だってｗｗ　あっそうだ、今日は昨日のアレ持ってきてないよな？」

「あたりまえです！　あれは没収されたくないですから…。」

「そうか…。　そういえば、長嶋はなんの楽器になりたいんだ？」

「俺はユーフォが吹きたいです！」

「え？　ユーフォが吹きたい！？」

「はい！　昨日先生が吹いているのを見て俺もあんな風に吹きたいって思ったんです！」

「なんか照れるなｗｗ」

「あっ、昨日のので思い出したんですが、本当に大丈夫でしたか？」

「大丈夫だって！　俺は頑丈だから！！」

「それなら良かったです！」

「あっ、今日は全体で合奏するからちゃんと聞いておけよ！」

「わかりました！」

「あとで感想きくからなｗｗ」

「マジですかｗｗ」

「おうマジｗｗ」

「だからちゃんと聞いておけよ！」

「はい！」

今日も先生と話せて楽しいな！

って、なんでこんな気分になるんだろ…？

入部！！

あれから数日後、やっとこの日がやってきた！
俺は心を弾ませて部室に行こうとしていた。
その時、後ろから声をかけられた。

「ねえ、君も音楽室にいくん？」

誰だこいつら…。

「困ってるだろｗｗ　ごめんなｗｗ」

「あっ、いやあんたらたちは誰なん？」

「俺は、将って言うねん　んで、そっちが」

「俺は、祐って言うねん。」

「君よく音楽室におるやろ？　だから、入部する子かなって思ってｗｗ　ちゃう？」

「えっと、そうだけどあんたらもなん？」

「そうやで、なぁ行く方向同じやからさ一緒に行かへん？」

「別にええけど？」

「ほんまに！　んじゃ、一緒に行こうや！！」

「おうｗｗ」

「んじゃ、二人は同じ学校なん？」

「そうそう、祐と一緒の学校の学校に行きたくて頑張ってんｗｗ」

「仲ええねんなｗｗ」

「まぁｗｗ」

「って、あんたの名前聞いてなかったなｗｗｗ」

「あっ、ほんまやｗｗ　俺の名前は晃っていうねんよろしくな！」

「よろしくな晃！」

「ついたな…。」

「って、なんで皆教室の外にいるんだ…？」

俺たちが音楽室に着いた時なぜか、一年生であろう奴らが音楽室の前に座っていた。

「……。　ねぇ、なにしてんの？」

「えっ…。　実は……。」

話を聞くと、音楽室に入ろうとしたら先輩に止められたらしい…。

「んじゃ、しばらく待つ？」

「そだねｗｗ」

しばらくすると、誰かがこっちに来た…。

「あれ？　長嶋？　それに一年生？　何してんの？」

「あっ、進藤先輩…。　実は……」

俺は先輩に事情を説明した…

隣から聞いていた岡村先輩が

「なんやｗｗ　そんな事かｗｗｗｗ」

「えっ！？」

俺がおどろいていると進藤先輩が
「大丈夫やｗｗ　毎年何かやんねんｗｗ　ここまで来ると、吹部の伝統みたくなってるな…ｗｗ」

「そうなんですか…。」

「だから、一年はおとなしく待っときｗｗ」

「わかりました…。」

それから、数分たち先輩の一人が
「皆そろったか？」

「えっと、揃ってるみたいです…。」

「そうかｗｗ　んじゃ、入ってくれるか？」

「「はい！」」

そして、俺たちの部活が始まった。

入部！！（後書き）

堀山（ほりまや）　祐（ひろ）

誰にでも優しく、頭も良い。
将とは昔からなかがよい。

山崎（やまざき）　将（まさ）

皆を盛り上げるムードメーカー的なぞんざい。
優しく、話しやすい。
祐とは昔からなかがよく、一緒の学校に行きたくて勉強をした。

自己紹介

パーンッ

「うわっ！」

部室に入ったらなんと、クラッカーを持った先輩たちが目の前に現れて鳴らしてきた！

「入部ありがとう！　ここの全員を代表してお礼を言わせてもらうな！！」

そういって、進藤先輩が挨拶をしてきた。

「まぁ、こっちに座ってくれるか？」

続けて岡村先輩が言ってきた。

「まずは、顧問の先生からの話とかやねんけど、先生遅れとんねんな…。」

「まぁ、最初は自己紹介からでもしとこうかｗｗ」

「んじゃ、まずは二年から！」

「え～ｗｗ　なんで二年からなんですかｗｗ」

「いいじゃん、つか毎年二年からやしｗｗ」

「わかりましたよｗｗ　それじゃ、俺からいきますね！」

そう言って先輩たちが順に自己紹介をしていった…。

「んじゃ、三年やんな？」

「そうやなｗｗ」

「んじゃ、かおるんからいこうかｗｗ」

「かおるん言うな！！」

「夫婦喧嘩より、早く自己紹介しろよｗｗ」

「誰だ夫婦喧嘩とかいったやつ！」

「いいから、早く自己紹介しいやｗｗ」

「まぁ、そうだなｗｗ　俺の名前は…」

そして、先輩たちの自己紹介も終わり、いよいよ俺たち一年の番がきた。

「んじゃ、一年生行くか☆　誰から行く？」

「それじゃ、僕からでいいですか？」

「おっ！　いいでｗｗ」

「んじゃ、トップバッターの君行ってみようか！」

「はい！　僕の名前は永里　有紀千です。　担当したい楽器はホルンをしたいです。　よろしくお願いします！」

「永里くんありがとう。」

「えらい真面目な挨拶やけどなｗｗ　まぁ、ホルンパートの奴永里くんを覚えておいたれよｗｗ　もしかしたら、未来のホルンの子になるかもしれれんからなｗｗ」

「それじゃ、次は誰かな？」

「はいはーい！　俺が行きまーす！」

「おっｗｗ　元気がいいそこの奴ｗｗｗｗ」

「はーい！　俺の名前は唯尾　絢兎でーす！　前からトランペット吹いていたんで、トランペット吹いていきたいです！！」

「なっ！　経験者かいな自分！？」

「はい！　よろしくお願いします！」

「トランペットの奴ｗｗ　経験者登場やって！」

「やばいな☆　トランペット！　唯尾くんに抜かされへんように頑張りや！！」

「「うっす！」」

「岡村先輩ちょっといいですか？」

「ん？　どうしてん唯尾くん？」

「俺はトランペットやるときは、こいつと一緒がいいですｗｗ」

「ん？　どの子や？」

「ほらっ、春彦立てってｗｗ」

「ちょっ！　絢くん！？」

「んじゃ、君行こうかｗｗ」

「はぁ…。　僕の名前は岡田　春彦です。　担当したい楽器はトランペットです。　しかし、僕は絢くんとは違い経験者では無いです…。　よろしくお願いします。」

「よろしくな☆」

「んじゃ、次は？」

「はい！　僕行きます！」

「んじゃ、行こうかｗｗ」

「はい！　僕の名前は田澤　文也です。　担当したい楽器はトロンボーンです！　よろしくお願いします！」

「おおっｗｗ　えらいでかい声やなｗｗ」

「んじゃ、次！」

そう言って、次々みんな自己紹介をしていった。

「んで？　してないやつは誰や？」

「はい…。」

「なんや、長嶋かいなｗｗ」

「いや～ｗｗ　すみませんｗｗｗ」

「長嶋で最後やからしっかりやれよｗｗ」

「はいｗｗ　俺は長嶋　晃っていいます！　担当したい楽器はユーフォです。　よろしくお願いします！」

パチパチパチパチ
「おおっｗｗ　これで全員やんな？」

「つか、長嶋最後やってんからオチつけなｗｗ」

「オチってなんなんですか！ｗｗ」

「ええやんｗｗ」

「「あははっｗｗ」」

こうやって俺らの騒がしい自己紹介が終わった。
すごく楽しかったなｗｗｗｗ

自己紹介（後書き）

永里（ながざと）　有紀千（ゆきち）
ザッ優等生な人
なにをやるにも真面目で皆の頼りにされている。

唯尾（ただお）　絢兎（あやと）
気が強く、ポジティブでフレンドリー。
トランペットの経験者で、入学式で春彦と出会いつるんでいる。

岡田（おかだ）　春彦（はるひこ）
誰にでも優しく、笑顔がたえない。
入学式で隣に座っていた絢兎になつかれる。

田澤（たざわ）　文也（ふみや）

笑顔がかわいくて、テンションが高く声がデカイｗｗ
人思いで優しい人。

遅れて登場

ガラガラガラッ
「あいかわらず、後輩が入ってもうるさいやつらやなｗｗ」

「あっ、遅いで先生！！」

「すまんすまんｗｗ　会議が長引いてんｗｗ　でも、ちゃんと来たやろ？」

「そこは、許すｗｗ」

あはははっ！！

部室内が笑いに包まれた
本当に、楽しい部活やなｗｗ

「先生、とりあえず新一年に一言いって貰えませんか？」

「わかった。　新入生の皆さん始めましての人もいれば、久しぶりと言う人もいるかな？」

そして、先生の話は続いた。

「とりあえず、三年間吹奏楽部として頑張ってください！！」

「「はいっ！！！」」

「それじゃあ、俺は他の仕事があるから進藤、岡村あとはまかせたぞ。」

「わかりました！」

「いってらしゃいｗｗ　また戻ってくるん？」

「あぁ、一年が帰る前にまた連絡してくれ。」

「わかりました。」

「それじゃあ、二・三年はパート練習で一年は教えないといけない事があるから、ついておいで。」

「「はい」」

よし、これから頑張るぞ！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6712y/

叶わない恋

2012年1月6日22時48分発行